第21号
2016.3

青少年赤十字

賛助 ひろしま

青少年赤十字賛助奉仕団信条

1. 青少年赤十字の充実発展に協力奉仕する。
1. 赤十字思想の普及啓発に努め、平和な社会の実現に寄与する。
1. 志を同じくする人々と手をとりあい、研鑽に努める。

発　行　広島県青少年赤十字賛助奉仕団　〒730-0052 広島市中区千田町2-5-64
事務局　日本赤十字社広島県支部　ＴＥＬ（082）545－5011

賛助奉仕団の今後の取り組みについて

委員長　日高敬司

組織の活動はともすると前年通りとマンネリ化して参ります。来年度は次の三点を活動の中心に据えたいと考えています。

第一は，学校訪問について

昨年度末に県支部組織振興課長から教材「青少年赤十字防災プログラム『まもるいのち　ひろめるぼうさい』」を配布して貰えないだろうかという打診があり、団員それぞれができる範囲で学校訪問して校長先生に手渡したところです。また、十二月には広島市内の小学校を訪問に同道して欲しいということで，私たちも小学校を訪問いたしました。県支部の方とは違った視点から校長先生とお話することができました。そして，学校現場での様子も知ることができました。来年度は計画的に訪問することを考えたいと思います。

第二は，「いとすぎプロジェクト」について

現在植樹に供する苗がなく中断しているところです。このいとすぎは発芽が非常に難しいので，広島県立西条農業高校へ苗になるのを依頼したところ快く引き受けていただきました。苗になったところで団員が自宅に持ち帰り植樹するまで育て、学校に配布していこうと考えています。

第三は，他奉仕団との連携です

奉仕団委員長会議や奉仕団研修会で他奉仕団の皆さんとお目にかかることがありますが，接点が非常に少ない事情があります。先日の委員長会議にて，ＪＲＣ加盟している小中高校を提示し，連携をお願いしましたところ，反響がありました。そこで，来年度は地域奉仕団との連携を考えていきたいと思います。

平成二十六年度中・四国ブロック青少年赤十字賛助奉仕団連絡協議会・研修会　報告

幹事　寺田宣文

好天の十月十五日・十六日の二日間に渡って鳥取市で開催された当研修会に、広島県からは六名（全五十四名）が参加しました。また、今回は、各県指導者協議会と各県支部職員との三者による合同研修になりました。青空と紺碧の日本海をのぞみながら、鳥取県の賛助奉仕団と日赤鳥取県支部の方々の温かいおもてなしを受けながらの研修は、実に思い出多い中身の濃いものであったと思います。

○第一日

一　開会行事

二　各県賛助奉仕団情報交換

・賛助奉仕団の活性化について
・防災教育の取り組みについて
・他の奉仕団との連携・協力について

三　指導者協議会と賛助奉仕団の連携強化について

○二日目

一　視察①　岩美町立岩美北小学校

二　視察②　山陰海岸ジオパーク

三　閉会行事

各県の賛助奉仕団の実践や抱えている悩み等を出し合いながら、二日間の交流研修で明らかになったことを列記してみたいと思います。

①　自分自身や賛助奉仕団の活動を振り返り、まず自分でできることは何かを見つけ実践しよう。

②　県支部・指導者協議会・地域奉仕団と連携を探り、必要に応じて、自治体行政や教育委員会への協力要請を進めなければならない。

③　特に、指導者協議会（加盟校）との連携強化に努めなければならない。

実践例や具体案が各県の参加者から報告される中で、新たな展望が多く生まれてきたように思います。また、二日目の岩美町立岩美小学校の学校訪問では、青少年赤十字の活動の原点・取り組みの初心をあらためて感じることができたように思います。小学校と校区内の地域奉仕団の連携の取り組み発表では、岩美の地域資源をうまく生かし、各方面の応援を得ながら進められていく青少年赤十字活動に感動を覚えました。また、町行政が実によくバックアップされ、町あげての教育支援・子育て支援が行われていることを知ることができました。

また、前年の愛媛での研修会でも紹介されました「いとすぎの苗づくりと加盟校への贈呈」は、この鳥取においても大きな話題になりました

平成二十七年度全国青少年赤十字賛助奉仕団協議会総会　報告

委員長　日高敬司

平成二十七年七月二・三日、日本赤十字社本社において、全国四十七都道府県委員長、日赤本社関係者六十余名が参加して開催されました。

○第一日

一　開会行事

二　総会

①平成二十六年度事業、会計・監査報告

②役員改選

③平成二十七年度事業計画・予算案

④その他

・青少年赤十字賛助奉仕団バッジについて

・青少年赤十字賛助奉仕団の旗について

三　分科会

五つの班に分かれて、テーマ①奉仕団活動の充実②実りある学校支援について研究協議した。

○第二日

一　全体討議

二　研修

講演　赤十字七原則について

講師　日本赤十字看護大学教授

赤十字は実践中から原則が生まれたものであること、そして最新の動向等を具体的な経験をもとに分かり易く講義をしていただいた。

三　防災教育教材の紹介

四　分科会報告

五　閉会式

平成二十七年度広島県青少年赤十字賛助奉仕団総会　報告

幹事　采谷宣子

今年度の総会は、四月二十四日午前十時から日赤県支部において開催しました。

一　平成二十六年度事業及び会計報告について

・会計監査は四月四日午前九時から行い、引き続き役員会で承認の後総会で承認されました。

・昨年度対談者八名、ご逝去三名で本年度の団員数三十名（ご高齢や退団者やご逝去があり、団員数が減少しています）

二　平成二十七年度事業計画及び予算について

本年度の事業計画及び予算が承認されました。（一及び二の事業及び予算・決算については各団員に報告したとおりです）

三　本年度団費は全て完納済みです。

四　今年度行事等について

旅行など親睦を取り入れたものとするため、中四国ブロック大会にできるだけ多く参加することを申し合わせました。

五　その他

・いとすぎプロジェクト推進のため、いとすぎの苗をそだて、県内の学校に植樹する活動を推進する。夏のトレーニングセンター（トレセン）、指導者協議会、県大会、各研修会等への参加、日赤県支部の活動に積極的に協力する。

実践報告

青少年赤十字研究推進校として

安芸高田市立郷野小学校長　津田泰成

本校の木造校舎は、本年十一月三日に築八十年の節目の年を迎えた。学校沿革誌をめくると、本校と赤十字社のつながりをいくつか垣間見ることが出来る。

（長い廊下を糠ピカ・レース）

明治三十四年四月には、当時の赤十字社総裁小松宮彰仁親王が本校の前身である郷野尋常小学校に立ち寄られ、松を植えられたとの記録が残されている。また、昭和十五年二月には、第六学年の女子児童が帝国少年団協会から模範少年赤十字団員として全国表彰を受けたとも記されている。

このような赤十字社との深い縁の中、本校は平成十九年一月に青少年赤十字に加盟登録した。昨年度からは、青少年赤十字研究推進校（平成二十六～二十七年度）の指定を受け、「気づき・考え・実行する」児童の育成に取り組んでいる。

この態度目標を学校教育全体の中に根付かせることを願い、児童の発案のもと「気づき・考え・実行する」という三本の矢を持ったマスコットキャラクター「まなびやくん」を作成し活用している。

今年は戦後七十年の節目の年であることから、「平和」をテーマとして様々な取組を進めてきた。七月には、呉市から本校へ疎開していた当時の疎開

児童の方からお話を聞く機会を持つこともできた。また、本校がＮＨＫの被爆七十年特集ドラマ「赤レンガ」のロケ地となったことから、このドラマに児童がエキストラとして出演し、戦争と平和についてより深く考えるよい機会ともなった。現在の学び舎が戦争前から存在していることの重みを再認識させられるところである。

九月三十日には、研究主題を「感謝と奉仕の心をもつ児童の育成」～対話の生まれる道徳の時間の授業づくり～として、研究会を開催した。市内外から二百名を超す皆様にご来校頂き、対話をキーワードに授業を公開した。異なる他者と共存していくことのできる地球市民としての資質や能力を身に付ける上で、対話力は、今まさに身に付けさせるべき重要な力であると考えるところである。

平素の具体的な取組としては、「指示されて動くのではなく、自分から主体的に動く」こと目指して取り組んでいる「ノーチャイム生活」や様々な奉仕活動等がある。

特に、高齢化が進む地域にあって、地域の皆様と協働して取り組んでいる「友愛訪問」の取組は、児童の奉仕する心を豊かに養う有益な活動であると感じている。

この活動は、四年生が福祉をテーマとして取り組む「ふるさと学習」の一環で、地域の高齢者の皆さんに手作り弁当を届ける取組である。自分たちが種から育てた大根を弁当に使って頂いたり、箸袋や弁当の包み紙を自作するなど、真心込めて作った弁当に手紙を添えて地域の方と一緒に配布するのである。普段ほとんど出会うことがない高齢者の方とのふれあいを通し、地域の人たちの心の温かさや、地域の高齢化という現実にも気づくこととなっている。

子供たちが一連の活動を通して何に気づき、何を考え、何を実行に移すか。青少年赤十字活動を通じて、足元からの平和を築いていきたい考えている。それが、世界平和の第一歩だから…。

親子で五七五の作品を

副委員長　河戸靖子

「ねえ、お父さん、可愛川に鮎いるよね」
「うん。おるで」
「よし、僕はこの鮎を描くぞ」
「ママ、茄子の大きさこのくらいに描くよ」
「見て、本物はもっと大きいよ」

など、語らいながら、安芸高田市立郷野小学校の親子で仕上げる「五七五俳画教室」の会場はにぎやかである。今日はその郷野小学校でＰＴＡ行事として俳画作品を手がける日だ。

八月下旬、早朝から保護者の方はＰＴＡ作業（校舎外の溝掃除や草刈り等）を、児童は校舎内を大掃除。校舎は歴史ある木造校舎で、児童は黒光りしている床を毎日糠雑巾で廊下を磨いている。一年に一度全児童参加の「ぬかピカレース」がおこなわれ、これはテレビ放映されるくらいに有名である。

さて、私は画材に関する季語になる夏野菜や花、可愛川に泳ぐ魚など二百余点を準備して、自由に材料を選べるように体育館に並べて置いた。

ＰＴＡ会長さん、校長先生の挨拶など開会行事が終わり、日本画風な作画に入る。昨年の保護者は見守りが多かったが、今年は一枚の用紙に「親子の作品を書こう会」にしよう、そして季語には余りとらわれず、親子の思いを大切にしようと話し合いで決まっていたので、積極的な取り組みになった。私は必要事項を話し作品例を描いただけですぐ作品作りに入ってもらう。

全員が絵の材料を選び、親子が頭を寄せ合って作品を描きあげていかれる。親と中高学年は筆と墨に挑戦し、そして彩色。兄弟の間を行き来される保護者は忙しい。やがてできあがった作品を見ながら親子で

「ええねぇ、キュウリの蔓の線が生きとるねぇ」

「うん、お母ちゃんのこの言葉もよう利いとるよ」など互いに苦労して仕上げた作品を評価し合う姿も美しい。先生が担任児童と保護者の合同作品を展示して写真を撮りながら頷いておられる。例えば、

子A「みんなの笑顔が一番好きだ」

親A「お家のね，みんなの笑顔が好きなんだ」

子B「家族はね私の味方、愛している」

親B「大好きな子どもの笑顔ありがとう」

かくして親子満足のうちに行事は終わり、秋を迎えた。この全校作品群は当校で実施された「青少年赤十字研究会」に校舎内に展示され、参加された多くの先生方や保護者の方が立ち止まって見入っておられた。その先生方の中から「あっ、これ親子で取り組んでおられる。いいなあ。やってみたい」というささやきや、保護者の方は「夏が懐かしいね、こどもの想いがわかった」という声が聞こえていた。

実践報告

やまゆり訪問（日赤原爆病院訪問）六十五周年を迎えて

広島県安芸太田町立上殿小学校長　栗栖　さゆり

広島県の北西部に位置する安芸太田町立上殿小学校。全校児童わずか十五名の小さな小さな小学校ですが、「やまゆり訪問」という大切な伝統があります。本年度六十五周年を迎え、青少年赤十字広島県大会で、訪問の由来や様子をオペレッタで報告しました。

昭和二十六年、上殿小学校は、青少年赤十字団に加盟していました。広島に博覧会を見に行く機会に青少年赤十字団として、「日赤病院にお見舞いに行ってはどうだろうか。」ということで、真心を伝えるとともに、当時地元の山にたくさん咲いていたやまゆりの花を届けることになりました。

ところが、当日行きも帰りもやまゆりを届ける時間がなくなってしまい、先生一人が、やまゆりを届けることになったのです。

一週間ぐらいたったある日。日赤病院長から、学校に分厚い封書が届きました。美しいやまゆりの花をたくさんありがとう。こんなやさしい心に接したことはないと、わざわざ返事をくださったのです。

「来年からはみんなの手で、やまゆりを届けよう。」

こうして「やまゆり訪問」が、始まりました。

その後三十五年たち、地域の人たちの平和への願いが、やまゆりの像として、形になりました。男の

子が鳩を掲げ、女の子がやまゆりを持ち、像は、広島市に向いて立っています。上殿の石工さんの技のもと、分けていただいた貴重な被ばく石で台座も作られました。

年々少なくなっていくやまゆりの花。やまゆり栽培にも地域の人の協力で挑戦しています。種を植えたり、草刈りを手伝ったりして、大切に育てています。

今年上殿小学校は、やまゆり訪問六十五周年を迎えました。現在も、学校の花壇や地域の庭で育ててくださった花などを中心とした花束と手作り文集を届けに「やまゆり訪問」をしています。患者さんに、少しでも元気になっていただきたいという願いを込めて…

『平和を大切にする心』

『やさしく　思いやる心』を胸に、子供たちとこれからも「やまゆり訪問」を受け継いでいきたいと思います。

青少年赤十字展を終えての私の夢

顧問　横田二郎

「青少年赤十字展」を今年（二十七年度）も例年どおり、十一月七日（土）・八日（日）、東広島運動公園体育館において行われた「第二十五回東広島市生涯学習フェスティバル」に参加して「東広島赤十字奉仕団」との共催で実施しました。

開催趣旨「青少年赤十字では、自ら課題に『気づき』、その原因や解決のための道筋を『考え』、問題解決のために『実行する』生活態度を養い、命と健康の大切さを学び、人間尊重の精神を養う『健康・安全』、社会や世界の一員としての責任と自覚を育てる『奉仕』、異なった文化や習慣を越えて世界の仲間と仲良く生きる力を育てる『国際理解・親善』の三つを実践目標としています。こうした「生活態度目標」と「実践目標」のもとに、具体的な活動を続けている「青少年赤十字」（ＪＲＣ＝Junior Red Cross）についての紹介を行い、地域の諸団体や住民の方々との連携・協働を期待しています。」に基づいて実施した催事であります。

東広島市内のＪＲＣ加盟校九校（小谷、造賀、西志和、東西条、吉川の各小学校、広島中学校、河内・豊田・広島の各高校）の全校が、学校の実情に応じ

た夫々の活動状況を展示物によって報告するとともに、青少年赤十字の活動についての理解を深めるために、日本赤十字社県支部提供による諸資料の展示・頒布、ＤＶＤ放映等も行いました。

当日の参加人員は、七日九千名、八日一万一千名、計二万名でした。多くの住民の方々への理解を深めるための、この催事の効果については、具体的な調査測定はしていませんが、地道な活動としての評価は得られているように思っています。ただ、ここで、この催事を契機として、さらに学校での活動の日常化へと連携・協働できていくことを期待すれば、多くの課題を持つことになるように思います。

加盟校を中心とした学校での青少年赤十字活動の力が、地域の力となり、さらには家庭での日常化へと繋がっていくにはどうすればよいか。まずは、地域内の加盟校間の交流から連携・協働への機会を設けることが必要かと思います。このためには、日赤広島県支部県支部担当部門や日赤の地区組織のお力添えが望まれます。賛助奉仕団がその間の労を持つことも考えられることだと思います。

そして、学校での活動の力が、地域の力となっていくためには、熊野町に例を見るように、地域全体の理解と協力をうることが必要と思います。教育委員会や諸校長会等のご理解とご協力を得ることが大切だと思います。

また、住民・家庭への赤十字活動の力を及ぼすためには、日赤の地区組織の協力があれば効果的であり必要なことだと思います。日赤の地域組織の現状では、責任者が存在しないことから、地域の奉仕団等の協力が考えられると良いのではないかと思います。

先ずは、住民・家庭への積極的な情報の提供により赤十字活動への理解を深めることが大切かと思います。若い世代の方々の奉仕団への加入により、想いが継承され、実現することを期待してやみません。

米寿を迎えての「私の夢」です。　合掌

青少年赤十字登録式　中学校）に出席して

副委員長　山中章敬

青少年赤十字の登録式の行われる学校のうち八校で赤十字広島県支部の人と出向き話をさせていただきました。

中学校の登録式は、次のプログラムをメインとして組まれています。

・空は世界へ
・校長先生のお話
・生徒会長の話・ＪＲＣ活動報告
・赤十字の人の話（賛助奉仕団）
・バッジ授与（日赤県支部）
・登録
・誓いの言葉

初めて青少年赤十字に出会う一年生と二年目・三年目の上級生の集う登録式で、①ソルフェリーノでのアンリー・デュナンから始まる赤十字の誕生②赤十字の活動③青少年赤十字について④ＪＲＣ活動について④一年ごと行われる登録式の意味⑤態度目標「気づき」「考え」「実行する」などを中心に話をしました。

どの学校も、真剣に話を聞いてくれる生徒に、今後の活躍が期待できる登録式になりました。

青少年赤十字登録式　小学校）に出席して

幹事　釆谷宣子

四月二〇日（月）呉市立昭和東小学校（児童数４８名）でのＪＲＣ登録式に講師として派遣されました。体育館では児童が整然と並び、はじめの言葉、誓いの言葉、学校長挨拶、ワッペンの贈呈（一年児童代表）と進み、講師の先生のお話というところで、私の出番が回って来ました。私は赤十字というものがどうしてできたのかを分かってもらうために、赤十字の創始者「アンリーデュナン」の物語をパワーポイントで作成し、映像を見せながら話しました。そして「デュナンの博愛精神から生まれた赤十字の精神を子供の時から育てようということで青少年赤十字という組織がつくられたこと、あなた達はそういう尊厳を持った組織の一員になったのですよ」と結びました。子供たちは皆、厳粛な気持ちで元気よく「空は世界へ」を歌い、閉会しました。

トレセンスタッフとして

今号では小学校では河戸靖子，中学校では山中章敬，高校では日高敬司・野田崇とそれぞれ賛助団員がスタッフとして参加しているので校種ごとに報告します。

☆青少年赤十字小学校トレセン

副委員長　河戸　靖子

今年度の青少年赤十字小学校トレセンは八月二十一日から二泊三日で、広島青少年文化センターにて開催された。

第一日は「開校式」、「アイスブレーク」、「赤十字の誕生」、「ＶＳ」、「健康安全プログラム」、「ホームルーム」、「ホームルーム連絡会」

第二日は、「朝の集い」、「青少年赤十字の活動」、「点字」、「車いす体験」、「高齢者体験」等の選択学習、「フィールドワーク」「国際理解学習」

最終日は、「ＶＳ」、「退所のために美しく掃除」、「これからの学習を考える」、「ホームルーム」「退所式」であった。

児童の様子はといえば、初日は不安と心細さが一杯という状況であった。しかし、初日の夜の「健康安全のための理論と実習」、二日目の自分で選択した学習あたりから変容が見えてきた。フィールドワークでは、各ホームルームの個性・団結や自分にできる限りの努力が発揮されてきた。

例をあげると、フィールドワーク「俳句の国」では、トレセンの思い出を各ホームルームごとに俳句に表現する課題であった。この中で「誰かが作れば」という態度では完成しないと分かると、俄然仲間意識が芽生え、五七五の言葉や季語を出し合って俳句作品を完成させた。

顕著であったのは、フィールドワーク「健康安全の国」であろう。この国では、スタッフの方が炎天下のもとで、「怪我をして苦しんでいる人」になり，君たちはどうするかという課題である。昨日まではよそよそしい態度であったが、昨夜の「健康安全」で身につけた技術やアンリ・デュナンが無関心ではいられない気持ちから傷病兵のために力を尽くしたことを知っていたから、ここでは大いに違った。

「大丈夫ですか」と声をかけ、「止血はこう」と自分たちの知識の全てを出し合い工夫した。「暑いでしょう」と自分たちのタオルで覆ったり、日陰を作ったり、持参していた自分たちの飲み水のペットボトルを怪我をした人の脇の下に入れて体温を下げようとしたり、身につけた知識と技術を駆使して頑張った。わずか十歳の子どもたちであるが、トレセンの成果からうまれた協力の力であった。

こうして三日間の活動を終えた子どもたちは、思い出のＤＶＤを見てお互いに寄せ書きをしようと話し合い、全員がともに歩んだ思い出を書き、各自の小学校へ帰って何をすべきかを確認した。児童の変容の三日間であった。

☆青少年赤十字中学校トレセン

副委員長　山中章敬

平成二十七年度の広島県青少年赤十字中学校トレーニングセンター（中学校トレセン）が府中町の広島青少年文化センターを会場として、八月十八日～二十日に生徒三十八名、スタッフ二十名で開催されました。そのトレセンに、今年もスタッフとして参加

させていただきました。

中学校トレセンでは、赤十字の精神を理解し、学校や地域でＪＲＣのリーダーとして、行動することができるように十分考えられたプログラムで行われました。熱心なスタッフのもとで、次のような内容で参加者は学びました。

・赤十字と青少年赤十字
・ホームルーム
・国際人道法
・ＶＳ（ボランタリー・サービス）
・態度目標「気づき」「考え」「実行する」
・救急法（健康安全プログラム）
・各校の活動紹介
・防災
・フィルドワーク
・コミュニケーションのとり方
・計画の立て方（ワークショップ）

中学校は、加盟校の大部分が学校加盟（全校加盟）です。ＪＲＣ活動で行うことと生徒会活動が重なることが多く、中学校トレセンで学んだことが中学校生活のいろいろな場面で活用できます。

そのため、トレセンで学んで、自分の学校をよりよくしたい、さらには、生徒会長や生徒会役員になりたいという生徒も見られます。そのような参加生徒の中で、生徒同士の交流やホームルームなどでの意見交換がプログラムの内容を一層深めていました。三日間で生徒の成長の様子が見られ大変頼もしく思えました。

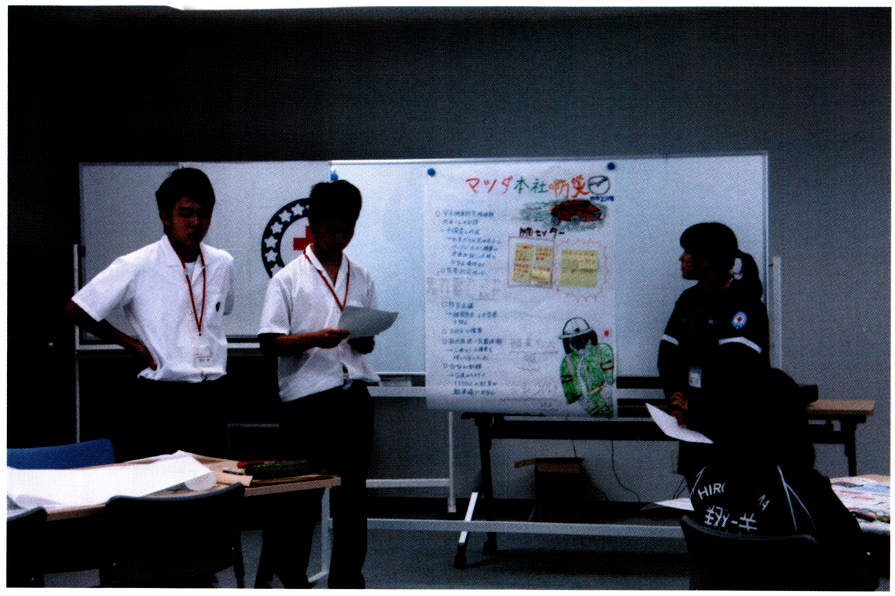
わずか三日間ですが、自分自身も参加者から学ぶことが多く有意義な中学校トレセンでした

☆青少年赤十字高校トレセン

日程及び会場は中学校と同じでした。高校での特徴は次の二点です。

第一は，フィールドワークを防災の観点から地元事業所へ訪問し，その結果を発表することです。事業所とは，①行政の立場（府中町役場），②大規模小売店の防災（イオンモール）③大企業での防災（マツダ(株)本社），④病院の防災（マツダ病院）です。それぞれ各班が分担訪問し，帰ってからまとめそして発表しました。

第二は，係活動です。トレセンではＶＳを大切にしますが，初めての参加者はなかなか困難です。そこで，係を作り自主的に行動するよう仕組みました。その係は，庶務係（各ホームルームのリーダで他に



属さないことすべて），環境係（所内の環境整備一切），食事係（毎回の食事の配膳，片付け等），レク係（朝の集い，各セッション合間のレクレーション）です。最初の集まりの中で，各係の仕事のあらましを提示しておきました。そのため，以前でしたら生徒はゆっくりする時間が多かったのですが，次々と忙しく活動するようになりました。

平和の象徴折り鶴の誕生とＪＲＣ その二〉

監事　恵美勇作

前回は、原爆症で苦しんでいる人たちがいることを知った名古屋の愛知淑徳高校ＪＲＣ生徒たちはお見舞いをしようと考え四千羽の折り鶴と励ましの手紙を赤十字社を通して送ったこと。その一部を入院中の佐々木禎子さんが受け取り、生きたい一心で折り鶴を折続けて亡くなりました。「サダコと折り鶴」の話は世界中に伝わっていき、人々を感動させました。平和記念資料館内に禎子さんの折り鶴が展示されています。今年（平成二十七年）の十月二十五日（禎子さんの命日）、六十年前に折り鶴を送ってきた当時の女子高生のうち五名が折り鶴を「原爆の子の像」と「幟町小学校」に持って来られました。

「ほんの一粒の活動が、こんな風に世界に広がったと考えたら涙が出た。世界中の人が、折り鶴を通じて禎子さんのことを伝えていってほしい」と話されています。

今回は、「原爆の子の像」建立の話を紹介します。一九五五（昭和三十）年十一月八日、新聞で禎子さんの死を知った青年（＊）が、「禎子さんをはじめ原爆で亡くなった子どもの霊を慰めるための像をつくろう」と禎子さんの小学校の同級生たちに提案しました。禎子さんの死を悲しむ同級生たちは像をつくることに賛成しました。十一月十二日、丁度広島で行われていた全国中学校長会会場前で禎子さんの小学校の同級生八人が、像の建立を呼びかけるビラを配りました。十一月末、ビラの趣旨に賛同した全国の中学校から、幟町中学校に像建立のための寄付金が寄せられ始めました。十二月、反響の大きさに驚いた幟町中学校は、市内の小・中・高校に運動への参加を呼びかけました。一九五六（昭和三十一）年一月二十八日、「広島平和をきずく児童・生徒の会」が市内各学校の生徒会役員によって組織されました。会の目的は、像の建立などの活動を通じて平和を築くために努力すること。四月、「広島平和をきずく児童・生徒の会」と禎子さんの同級生たちによる街頭での募金活動が繰り返し行われました。年末、全国の学校や海外から約三千件、合計五四〇万円の寄付金が集まりました。一九五八（昭和三三）年五月五日、「原爆の子の像」完成。除幕式が行われています。

「原爆の子の像」建立後、「広島平和をきずく児童・生徒の会」の一部の生徒たちが、原爆ドームの保存を訴える運動を展開していきます。

（「原爆の子の像」除幕式。昭和三十三年五月、全国四十七校代表百三十人を含め、約一万人が参加して開かれた。広島新史「市民生活編」より）

＊青年は、河本一郎さんという方で、広島女学院

高等学校に勤めていた折、校長だった加藤惣一先生と出会っています。加藤惣一先生は、広島市立国泰寺中学校長時代広島県に青少年赤十字を位置づけた先生であり「広島県青少年赤十字の父」です。また、全国青少年赤十字指導者協議会の会長でもありました。

スタディセンターのスタッフとして考えたこと

副委員長　野田崇

高校スタディセンター※（以下ＳＣ）に初めてスタッフで参加したのは一九九七年三月でした。以来一・二年の担任の時以外三月末の重要な日程になりました。二〇一〇年三月が最後のＳＣになりました。ＳＣ十三年間を振り返ってスタッフとして考えてきたことを、まとめてみました。

ＳＣプログラムは体験を通して学ぶこととし、なるべく講義をしないことを基本としています。ＳＣのプログラムは目的があって、達成目標にねらいを定め多様な手段を使って参加者に意図を伝えようとしています。ＳＣでは、このことを「仕掛け」と表現してオリエンテーションで「仕掛けを見抜け」とけしかけています。プログラムに込められているねらいを考えることを「仕掛けを見抜け」とオリエンテーションしていますから、ＨＲでは「仕掛け」を解説しながら「気づきの視点の多様性への気づき」を求めることになります。「仕掛けを見ぬく」ことによって、参加意識がより高くなります。

ＳＣに参加する生徒たちは、経験することによって学び、学ぶことによって経験を論理的に整理することが出来るようになり、知識・経験＝知恵が自分のものになります。「生徒たちの欲望と必要に対して応えられるスタッフでありたい。」との思いを込めて全力でプログラムを展開していました。

プログラムは、「気づきを待つ」展開になりますから、エンカウンター的要素・カウンセリング的要素・体験学習要素を持つことになります。プログラムに込められているねらいを考えることを「仕掛けを見ぬけ」とオリエンテーションしていますから、ＨＲでは「気づきの視点の多様性への気づきを待ち」ながら「仕掛け」を解説します。解説されることを自分のものとしながら、自ら成長するためには経験を自分の論理にする大切さに気づき、行動に生かそうとし始めます。

ＳＣが目的とする「気づき・考え・実行する」の態度目標を、自らのものとし始めているのです。気づきは、質的にも量的にも深まりを持ち、行動に移せるようになって本物になります。そして、このことによってリーダーの資質を向上させるのです。

「気づきを待つ」をＳＣの基本姿勢とするスタッフの持つ雰囲気は、参加者が「受容と寛容」「ＳＣ終了時の意識・雰囲気」によって、相互に影響を与えられながら「ここなら、何でも話せる」という心理状態になります。このことは時によって、「心の懊悩を話して受け入れてもらえる」とカミングアウトします。「家族のこと・人間関係のこと・苛めのこと・差別のこと」等など、日ごろから他人に話せなくて、もんもんとしている悩みや苦しみを、吐露する場が発現します。このことによってＳＣがより印象的になります。

エンカウンター的要素・カウンセリング的要素をプログラムの中心に据えていることは、参加者のカ

ミングアウト・自己変革の場面に立ち会うことを想定しています。五泊六日のＳＣが、参加者の生き方に大きな影響を与えていることが想定されるからこそ、スタッフのスタンスは生徒の期待に本気で応えようとする自覚と覚悟が求められます。

※スタディーセンターとは，全国から各県二名以内の生徒が集まって行われる本社主催の研修会である。

平成二十六年度青少年赤十字加盟概況（加盟校数・加盟率）

平成26年度青少年赤十字加盟校数
（単位：園、所、校）

校種	全国	広島県
幼稚園	843	6
保育園	829	20
小学校	6,746	142
中学校	3,297	90
高等学校	1,861	33
特別支援校	114	6
合計	13,690	297

成26年度青少年赤十字加盟率（幼稚園、保育園は学校数から除

	学校数（校）	加盟校数（校）	加盟率
全国	37,570	12,018	32.0%
広島県	946	271	28.6%

※学校数は文部科学省発表『平成26年度学校基本調査（確定
※加盟校数は、「平成26年度青少年赤十字の概況」から掲載

平成二十六年度広島県賛助奉仕団役員

委員長	日高　敬司
副委員長	大木　昭
	河戸　靖子
	野田　崇
	山中　章敬
幹事	采谷　宣子
	寺田　宣文
監事	吉丸　朝美
	恵美　勇作
顧問	射場利久男
	蔭山　龍児
	光本　涼子
	曽山　和彦
	田中　博
	塚本　晃史
	平越　幸男
	水野　善親
	横田　二郎

訃報

岡田孝裕氏（平成二十七年五月）
謹んでご冥福をお祈り致します。

編集後記

今年度は、鳥取県で中四国ブロック大会が開催され、六名が参加し、協議会での意見交換や、市内の小学校視察でＪＲＣ活動の模様を見学でき刺激を一杯もらいました。本県においてもどのように活動を活発にさせるか、臨時役員会を持ち、協議しているところです。たちまちは、加盟校促進のために、学校訪問したり、賛助団への入団勧誘に努めることを申し合わせています。

一方で、本会は高齢化が一段と進み、今年度退団された方が二名、ご逝去された方一名、連絡が取れない方一名という状況ですが、昨年度二名の方が入団されて、とても活気つけられています。これからも団員の結束をはかり、いとすぎプロジェクトを始めとする、活動や研修に邁進したいと思います。皆様の活動を機関紙を通してお伝えしてゆきますので、今後ともよろしくお願いいたします。

○編集委員

横田二郎、大木昭、曽山和彦、日高敬司、
河戸靖子、采谷宣子、寺田宣文、恵美勇作